



Title	フリードリヒ・ハイラー著、深澤英隆（監修）、丸山空大・宮嶋俊一（訳）『祈り』（宗教学名著選第四卷、国書刊行会、二〇一八年）
Author(s)	戸田, 聡
Citation	基督教学, 54, 29-31
Issue Date	2019-07-18
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/75531">http://hdl.handle.net/2115/75531</a>
Type	article
File Information	03toda.pdf



[Instructions for use](#)

フリードリヒ・ハイラー著、

深澤英隆（監修）、丸山空大・宮嶋俊二（訳）

『祈り』

（宗教学名著選第四巻、国書刊行会、二〇一八年）

戸田 聡

本書は「祈り」を扱った古典的な宗教学的著作とされるF・ハイラー著 *Das Gebet*（第五版）の翻訳である。全訳ではなく抄訳で、一九三二年にやはり抄訳として刊行された英語版を「おおむね踏襲」（宮嶋「解題」、五三二頁）して抄訳が行なわれた由。訳文はこなれており、文末で「〜である」と「〜だ」の二つが併用されて独自のリズムがあり、それなりに読みやすい。この読みやすさのために払われたであろう訳者の労苦にまず敬意を表しておきたい。

キリスト教研究を専門とする評者には、宗教比較を主眼とする学問分野である宗教学は全くの専門外だが、と

はいえ評者にも、ハイラーの本書が「祈り」を扱った古典的著作だと確認可能である。というのも、特に修道制研究との関連で評者がこれまで最も頻繁に参照してきた事典の一つ『靈性事典』に見られる、「祈り」に関する長大な項目記事<sup>①</sup>は、随所で参考文献の往々筆頭に本書（おもにその仏語訳）を挙げているからである。

しかし評者は、今回このような状況を確認して読み進めるにつれ、本書には決定的な偏りがあるのではないかと思うに至った。そこで以下この観点から、翻訳よりもむしろ本書の内容自体を論評することとしたい。

つまり、ハイラーの「祈り」概念は過度にキリスト教中心的なのではないか（同じ指摘は上記『靈性事典』の当該項目記事にも妥当する）。この点は既に序文から明白であって、例えば冒頭で提示される「祈りが宗教の核心にして中心部に位置する」（二三頁）という理解の論拠として挙げられている様々な著作家は、一人残らずキリスト教的背景を有するのである。

また著者は、「宗教学の課題と方法」（二五―三八頁）というやや混乱した叙述（「祈りの研究」を「宗教学の全

体図」の中に位置づけようとする意図から記されたものらしい)に引き続く「祈りの研究のための資料」(三八―五一頁)の中で、「石に彫られたり印刷されたりした何千もの祈り」や「太古の寺院の書庫に伝わる祈りや教化のために書かれた本におさめられた祈り」や「祭壇や説教壇から「語られる」荘重な祈りの言葉」などをいとも簡単に「真の自発的な祈りではない」とし、「祈りについてのほとんどの資料は……間接的な証言にすぎない」と切り捨てる。しかし私見によれば、祈りの本質は祈願、つまり「神だのみ」(超越者への祈願)であり、石に彫られた祈りであれ神社・神殿の落書きであれ、立派な言葉で祈られる祈りであれ受験シーズンの絵馬であれ、どれも祈願であることに変わりはない。そしてそうであれば、研究の方向性は本書のとは当然異ならざるをえないはずだが、本書は立派な言葉での祈りを重視しすぎている。その結果、「祈りの研究のための資料」で引き合いに出される祈り手も、名指しされる限りの人々はみなキリスト教的背景を有することとなってしまうている。

この関連で、本書の方法論的な問題を指摘するのは無

意味でないだろう。すなわち、本書には掉尾に「祈りの本質」という一章(第一三章、五一七―五三〇頁)が設けられているが、これはいかがなものか。扱われる概念が複合的(例えば「資本主義の精神」のように)であって一見直ちに明瞭とは行かない場合には、当の概念が研究の末尾で初めて十全な形姿を取ることがありえようが、祈りの本質が祈願であることは最初から充分明瞭であり、あえて掉尾で論じ直されるべき方法論的必要性はなく、よって方法論的に見て終章は余計である。そして思うに、著者がこの終章を設けたのはたぶん、「祈りとは神と語り、交流することなのだ」(五二九頁)という、本書の諸処で見られる主張を最終的に繰り返すためだったのであろうが、このような祈り理解が過度にキリスト教中心であることは論を俟たない。

さらに、本書の祈り概念のキリスト教中心的偏りは、再三出てくる「祈りの基礎にある神観念」「祈りの根底にある神観念」(目次を参照)といった論じ方からも窺える。私見によれば、日本の神社仏閣等に於いて見られる多くの祈願の背後にどれほど大層な「神観念」が在るかどう

かは極めて疑わしく、しかしだからといって、それら祈願が祈願（祈り）でないなどとは決して言えない。「いわしの頭も信心から」などという「神観念」がありうることは、生真面目なドイツ人ハイラーは夢想だにしなかったのではあるまいか。

以上の論評は、キリスト教以外の宗教や未開人の宗教観念をも扱う本書に対して不当ではないか、との批判がありえよう。そこで最後に第一章「未開人の素朴な祈り」（五三―一三三頁）を例に考えたいが、とはいえやはり問題は明瞭である。つまり確かに、特に七一―一〇二頁の「祈りの内容」に見られるように、全体としてこの章では非常に多くの事例が収集されているが、それら事例は、上述した「祈りの本質」に鑑みて――例えば、祈願の理由、祈願のタイミング、祈願の相手である神或いは神々（の機能など）、祈願によって期待される結果、そしてそれらの組み合わせの如何といった点について――個別の事例に即した形で徹底的な分析が為されているというよりむしろ、著者自身が設定する叙述の観点に従って、各事例がばらばらに解体された上で個々の要素が列挙されてい

る、という観が強く、つまり著者の観点が素材たる事例よりも優位を占めている。そして、私見によればその観点が、例えば祈りの言表のあり方を重視するといった点で、過度にキリスト教中心なのである。

祈り（祈願）については、キリスト教に偏しない観点から、非キリスト教的な素材を中心として徹底的な分析が為される必要が、ハイラー以後の今日も依然として存在すると言えるのではあるまいか。これを拙評のまとめとしたい。

(1) AAVV., art. "Prière", in: *Dictionnaire de spiritualité*, vol. 12, 2. pt., Paris: Beauchesne, 1986, cols. 2196-2347.

(2) 無論ハイラーもこの点は理解しており、「祈ることの核心は懇願 (Bitten) することにある。祈り (Gebet) という名称もこれに由来する」(七四頁) とある。だが、この点を基軸として本書全体の研究・叙述が構成されているとはおよそ言いがたいように、評者には思われる。なお、本文中括弧書きで記したように、ここで言う「祈願」とは超越者への祈願であり、評者自身は、宗教の定義は何らかの仕方では超越者概念を（当の超越者の「超越」の度合いがどれほどであれ）含まねばならないと考えていることを記しておきたい。